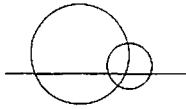


〈展示会〉



## 孫文と神戸

孫文記念館館長 安井三吉

**【司会】** 引き続きまして、安井先生にご講演をお願いしたいと存じます。安井先生のご講演は「孫文と神戸」という題でございます。安井先生の簡単なご紹介をさせていただきます。現在孫文記念館館長を務めていらっしゃいます。同時に神戸大学の名誉教授でいらっしゃいます。安井先生の専攻は中国近現代史で、特に日中戦争、それから孫文および孫文と神戸との関係について、大変ご専門の研究をなさっていらっしゃいます。特に今日のご講演のテーマと関係するご本として、『孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路』、それから『孫文と神戸：辛亥革命から90年』等のご著作がございます。その他多数ございますが時間の関係で講師略歴のほうを見ていただきたいと思います。それでは先生よろしくお願いたします。

**【安井】** ただいまご紹介いただきました安井でございます。舞子の明石海峡大橋のすぐもとにある孫文記念館の館長を務めております(1)。本日、お話しする機会を与えていただきまして、佐藤学長を始め愛知大学東亜同文書院大学記念センターの皆さま、ありがとうございます。また私たちが日頃使っておりますパネルが今回の展示を通じて少しはお役に立ったかなと喜んでおります。今日はセンターのほうから「孫文と神戸」ということで少し話をせよということでございましたので、簡単に紹介をさせていただきますと思います。

### 1 孫文(孫中山) —その時代、その業績

孫文とはどういう人物か、特に日本にとってどうい人物かということを考えてみますと、実は私のような人間が愛知大学のこのような講演・シンポジウムに出させたいたくということ自体が、実は孫文という存在なくしてはなかつたろうと思っている次第です。それはどういうことかということについて、今日のお話の中で触れさせていたきたいと思います。私どもの記念館は1984年にオープンいたしました。初めは孫中山記念館と申しておりましたが、4年ほど前に孫文記念館と名前を改めました。中国や台湾、あるいはシンガポールとかアメリカなどにも沢山の孫文の記念館がありますけれども、そういうところは国父記念館とか、あるいは孫中山記念館というふうに呼んでおりまして、孫文記念館という名称を用いているのはたぶんここだけだろうと思います。ご承知の通り孫文の「文」というのは名でありますし、「中山」というのは号ですね。そして中山という号は実は日本人の中山という姓を借りて号にしたものです。ですから面白いことに、中国人たちは日本人の姓を使った「孫中山」というのを用いていて、日本ではむしろ孫文自身が使っていた文という名を用いて「孫文」と言っているのです。このことは、孫文と日本の関係というものを象徴しているのではないかと私は思っております。英語ではSun Yat-senと書いています。

孫文はどういうことをした人物でしょうか。孫



文が生まれたのは1866年11月12日、広東省の、今は中山市、当時は香山県とっていたところでした(2)。孫文は大きく言えば二つのことを成し遂げたと思います。一つは辛亥革命を成し遂げて中華民国を創建したこと、もう一つは晩年ですけれども第1次国共合作を推進したこと、これら二つのことが彼の生涯における大きな仕事ではなかったか、と私は考えています。中国の近代史の上で、ということですが、そして孫文は、1925年3月12日に北京で亡くなりました。それから4年して29年6月に、孫文の遺骸は南京に移され、中山陵に改葬されました。その時行われた式典を奉安大典と申しますけれども、今年はその時から80年目ということになるのでしょう、南京の中山陵で盛大な式典が行われ、台湾からも要人が訪れて、一緒に孫文を追悼するということをやったようです。中国人の間では孫文はそういう位置であり続けているということです。

## 2 孫文と日本

日本と孫文との関係で申しますと、孫文は約30年間日本と関わったと言えます。日清戦争の後からですから、日本の歴史で言えば明治の末から大正いっぱいかけて生き抜いた人物ということになります。この30年のうち出たり入ったりがありましたけれども、孫文は合わせますと約9年間、つまり革命活動の約3分の1を日本で過ごしました。こういう中国の政治家は近代では他にないだろうと思います。

華僑がいたこと、たくさんの留学生がいたこと、こういうことが一つの条件であったろうと思いますが、孫文はその他、日本に滞在していた中国人以外の外国人とも、日本という場を一つの重要な舞台として交わっていたのです。では孫文と付き合い合った日本人はどれくらいいたのでしょうか。今私たちは孫文と関係した日本人の人名録を作る計画を進めています。一般には300人と言われています。これは萱野長知という孫文と非常に親し

かった人が『中華民国革命秘笈』というの本の中で、「300人近く」という数を挙げていることに基づいているのですが、これには萱野自身「予等の関知せざる人も多数あるかも知れぬ」(59頁)という断わりをつけています。私たちは1,000人は超えるだろうと予測しています。しかし大半は名も無き人たちですね。人名事典に出てこないような人たちが半分以上を占めています。このような人々をどうやって調べたらよいかということで、このセンターの皆さんにもいろいろお尋ねしたりして、何とか孫文と交流のあった日本人の記録を残しておきたいと取り組んでいるところです。孫文にとって日本というのは、彼自身の言葉を借りますと「第二の故郷」でした。彼はいつも中国の中央政府と対立しておりましたから、亡命が日本に来た大きな理由ですね。安全に日本で亡命生活を送れるということです。もちろんそれだけではなく、彼の革命を進めていくための拠点、特に華僑や留学生を対象にした活動をする拠点、それからさまざまな面での財政的な支援を獲得する、日本はそういう場であったと思います。この点で孫文にとって欧米というのが理論や思想を吸収する地域としてあったのとちょっと違った位置に日本はあったのでないか。この辺はまだ議論があるところではありますが、私はそういうふうに見ております。

1929年(昭和4年)に南京の中山陵で行われた奉安大典には多くに日本人が参列しました。頭山満、犬養毅、萱野長知など錚々たる人たちが参列をしています(3)。東亜同文書院とも関係のあった山田良政・純三郎の兄弟、こういう人たちも孫文との関係では重要な役割を果たしました。もうすぐNHKで放映される「坂の上の雲」の主人公の一人の秋山真之、彼もまた孫文と交流のあった人物の一人です。多彩ですね。政治家、軍人、渋沢栄一のような経済人、南方熊楠のような学者、それから民間の志士と呼ばれる人たちも少なくありません。彼らだけではなくて、孫文が亡命をした

時に洋服の仕立てをしたとか、そういう人たちも実はたくさんいるわけですね。そのような人たちも合わせて1,000人を越えるだろうというのが私たちの推測です。

### 3 孫文と神戸一戦前

「孫文と神戸」というのが本日の私の話の中心ですので、そこに話を絞ってまいります。彼が神戸に初めて来ましたのは1895（明治28）年、日清戦争が終わって間もなくの11月のことです。最後は1924（大正13）年で、この時も11月でした。孫文が生まれたのも11月ですから、私たち孫文記念館としては去年から毎年11月を「孫文月間」ということで、孫文と特に日本との関わりを中心にしながらいろいろ展示や講演などを始めました。お手元に今年のチラシをお配りしておりますのでご覧いただきたいと思います。

孫文は、神戸には前後18回来たと私は数えています。どれも短いものです。神戸というのは当時は海の出入りの場所ですから、孫文は日本に来る時はたいてい神戸で降りて、あるいは神戸から出ていきました。あるいは長崎から汽車で神戸に来て、という経路をたどることもありました。そういう意味では孫文にとって神戸は通過点であったと言えるかと思います。この点では横浜とか東京のように腰を据えて活動した場所とは違っております。滞在したのは長くて1週間程度です。18回の中で汽車で神戸駅に停まった時も含めて18回と数えていて、ややふくらましている面もなきにしもあらずですから、合わせてもせいぜい50日余りです。9年間のうちの50日余りということですが、それにも関わらず「孫文と神戸」は非常に面白いというのが私の実感です。

神戸では、華僑と日本人、両方の人たちが孫文をいろいろな形でバックアップしました。華僑の代表的な人としては呉錦堂、王敬祥、それから楊寿彭といった人たちが挙げられます(4)。日本人では三上豊夷、松方幸次郎、瀧川儀作といった人

ちを挙げておきたい(5)。もっとたくさんおりますけれども。華僑ということで申しますと今挙げた3人ですが、呉錦堂という人の別荘（移情閣）が今孫文記念館となっています。なぜそうなったのかということについては後にお話致します。呉錦堂は浙江省の人です。王敬祥は福建省金門島というところ—今は台湾の管轄下に入っておりますけれども—から出てきました。楊寿彭は広東ですね。ですから戦前における日本華僑、あるいは神戸華僑の三つの代表的な出身地、浙江を中心とした長江（揚子江）中下流域の人、福建省、そして広東省というそれぞれから出てきた代表的な人々が神戸では孫文をバックアップしていたのです。

日本人の中では三上豊夷という人物がまず挙げられます。彼は海運業者です。孫文が活動するには海というのが非常に重要ですから、海運業者というのは大変重要な意味を持っていたのです。三上は孫文のために日本で武器・弾薬を自分の船に積んで中国に運んだり、あるいは辛亥革命の時には船を出して、広東から南京まで革命軍の兵士を輸送する、そういうこともやった人物です。それから松方幸次郎は川崎造船所の社長を務めていた人で、現在の川崎重工業につながってまいります。どうしてつながってくるかということについてはまた後でお話します。瀧川儀作はマッチですね。明治・大正期の神戸を代表する産業の一つがマッチでした。神戸の商業会議所（現在の商工会議所）の会頭なども務めていた人物です。写真で見ると俳優の芦田伸介によく似た顔をしております。

孫文と神戸の最初の出会いは、先ほど申しました1895年の11月でした。孫文は広州での最初の武装蜂起に失敗し、香港から日本に亡命してまいります。これが最初の日本亡命ということでもあります。日本郵船の広島丸という船に乗ってやってきました。11月10日頃、神戸に広島丸が到着していたのですけれども、当時の神戸の新聞、たとえば『神戸又新日報』（今は『神戸新聞』に統合）などには、11月10日、つまり孫文が上陸したその

時点での紙面に「広東暴徒巨魁の履歴及計画」という記事があります。その中で「巨魁」、つまり指導者を「范某」と記しているのです。すなわち孫文という人物が上陸しているにも関わらず、神戸の新聞は彼のことを全く知らなかったということです。これが孫文と神戸との出会いでした。おそらく日本人の中でこの最初の亡命以前に孫文を知っていた人間はわずか数人程度だったと思います。香港で写真屋をしていた梅屋庄吉がそうですね。香港領事の中川恒次郎も知っておりました。それからもう1人菅原伝という人物がおります。その3人ぐらいか、あるいはもう少しいたかも知れませんが日本に亡命した時には孫文の名はほとんど知られていない、それが神戸との出会いのときの状況でした。

1913年（大正2年）3月、孫文が神戸に来た時の写真が何枚かあります。先ほどの藤田先生のお話の中にも出てきたと思いますが、孫文が準国賓として日本を訪れることのできた唯一の機会ですね。これは孫文と北京の袁世凱の関係がまあまあ良かった時期です。決裂していない。そういう時期ですから、孫文は中国政府の代表として日本を訪れることができました。孫文が中国の中央政府と関係が良かった時期に日本に滞在できたのはたぶんこの一月半ぐらいだけではないでしょうか。1枚目の写真は神戸の常盤花壇、湊川にあった当時神戸随一の料亭です。そこで兵庫県や神戸市あるいは神戸の商業会議所、そして華僑の人々が孫文を大歓迎をしたその時の写真です(6)。もう一枚の写真は呉錦堂の別荘、松海別荘という別荘の前のもので（移情閣は1915年に松海別荘に隣接して建てられました）。真中に孫文がおります。その左側に座っているのが呉錦堂で、さらにその左側、前列右から4番目は宋慶齡のお父さんの宋嘉樹という人です。前列の一番右側に座っているのはたぶん山田純三郎でしょう(7)。こういう人たちが呉錦堂の別荘でお昼ご飯をご馳走になりながら歓談をした。神戸の新聞も大々的に孫文を歓迎し

ましたが、華僑の人達が出した大きな新聞広告があります。真中に呉錦堂の名前があり、王敬祥の名前も出ています。

ところがこの13年という年は孫文にとっては天国と地獄をいっぺんに経験する、そういう年になりました。前半は袁世凱との関係は良かったのですけれども、後半になりますと袁世凱と決定的に対立いたしまして、いわゆる第2革命でまた袁世凱と武力で戦うことになりました。孫文はこれに敗北して日本に亡命をしてくるわけです。日本政府は袁世凱との関係を考慮して、孫文が日本に来ることを歓迎しなかったのです。何とかアメリカにでも行ってくれと、牧野伸顕外務大臣は繰り返し出先の領事館などに指示しているのですけれども、孫文はやはり日本を基地にしながら巻き返しを図りたいと頭山満や犬養毅などに船から電報を打ち、何とか上陸できるように日本政府に働きかけてほしいと要請します。

当時の首相は山本権兵衛という人物ですが、結局しぶしぶ上陸を認めました。この時も孫文は神戸から上陸します。そして東京で亡命の許可が出るまでの1週間、諏訪山の常盤花壇別荘というところに滞在します。諏訪山公園のすぐ近くですが、今は全くその面影はありません。孫文の泊まった宿屋がどこにあったか何とか特定したいと思っ

ているのですが、ここだというようにはまだ確定できていません。写真は残っているのですけれども。孫文は大正2年（1913年）の前半は準国賓として日本を訪れ、桂太郎や山本権兵衛、渋沢栄一といった、政、軍、経など各界の日本を代表する人たちと交流をしたのですけれども、後半になりますと今度は亡命者として日本に潜伏せざるを得ないことになります。

1924（大正13）年11月、孫文は北京の段祺瑞や張作霖と会談するために広州から北上してきます。孫文は上海まで来て、本当は天津にまっすぐ行くのが一番近かったのですが、あえて日本に立ち寄り、日本を経て天津に行く、そういう経路を

たどりました。なぜそうしたのかということについては今でもいろいろ議論がありますけれども、やはり彼は天津や北京に行って張作霖や段祺瑞と会談する前に、日本の政治家や経済界の要人たちと話し合っただけで自分の考えを伝え、できれば支持してもらおう。そういうことをした上で北京に行きたかったのではないかと思います。

しかし日本政府はこの時も「東京に来るな」という態度を取ったのです。加藤高明内閣の時です。日本としては、この時期は段祺瑞や張作霖のほうが重要だったのです。当時の孫文は南の広州という一都市を押さえるぐらいの力しかなかったのです。有名であり、日本でも民間人との親交は非常に厚かったのですけれども、日本政府にとって重要なのは東北（満洲）・華北というところですし、そこを実際に支配していたのは張作霖や段祺瑞であり、日本政府としてはそちらを重視するという姿勢だったのです。結局孫文は東京に行くことはできませんでした。1週間神戸のオリエンタルホテルに滞在していました。頭山満をはじめとして、たくさんの人たちがオリエンタルホテルを訪れて孫文と話し合いをしていきました。その間、神戸商業会議所会頭の瀧川儀作が、孫文に「大アジア問題」というテーマで講演をしてほしいと依頼したわけです。孫文はそれを受けて、11月28日兵庫県立神戸高等女学校—今の兵庫県庁のあるところですが—そこで講演を行いました。「大アジア主義」講演です。会場は立錫の余地もない、大変な数の市民が押しかけました。2,000人とも3,000人とも言われております。孫文の通訳をしたのが右側に立っている戴季陶（戴天仇）です(8)。彼は後に「日本論」という有名な本を書く人物です。日本語が非常にうまい人でした。20年ほど前、私はこの講演を聞いた人の話を聞いたことがありますが、孫文そのものの講演よりは戴季陶の通訳が素晴らしかったという人が少なからずおられました。しかし、この講演を聞いた方々もたぶんもうご存命ではないでしょうね。

このように1913（大正2）年、孫文が来た時大歓迎をした、あるいは孫文が亡命した時にいろいろ手助けをしたということ、そして「大アジア主義」という講演などの思い出が神戸の人々に今も伝えられています。この講演は、今でもいろいろな方々が、日中関係とか日本とアジアの関係について話す時によく引用されますが、日本と孫文との関係を象徴するような、そういう舞台を神戸が提供してきたということ。わずか50日余りの短い付き合いですが、神戸と孫文、あるいは日本と孫文という点で、神戸というのは大変重要な、あるいは面白いと言いますか、そういう役割を演じてきたと言えると思います。

孫文の日本観ということについてはいろいろな理解、まとめ方があると思いますけれども、彼の言葉を借りて表現しますと、彼にとって日本は先にも申しましたが「第二の故郷」であること、それから第1次大戦中の言葉でありますけれども、「日本なくして中国なし。中国なくして日本もなし」。さらに1923年、犬養毅に対して宛てた手紙の中で言った言葉ですけれども、「日本の維新は中国革命の先駆けであり、中国革命は日本の維新の結果である」。このように日中は相互関係にあるという捉え方をしていました。そして最後の「大アジア主義」講演については、彼が中国に戻った後これを論文として新聞に発表いたしますが、その際彼は講演の一番最後で、日本人はこれからいったいどういう道をたどるつもりなのかという問題を投げかけます。「これからの世界の文化に対して西洋覇道の鷹犬となるのか、それとも東洋王道の干城となるのか、このことについて日本国民はよくよく考えていただきたい」と、講演を結んだのです。孫文は1925年に亡くなりましたが、結局日本は覇道の道を選択をしてしまい、彼の問いかけに対して応えられなかったのではないかと考えております。

#### 4 孫文と神戸一戦後

私は、かねがね孫文が戦後どういうふうに住んで生きてきたのか、あるいはもう少し限定して、神戸という街の中でどう生きていたのかということにもっと関心を持ってよいのではないかと考えてきました。最初に、私がこういう場でお話をさせていただくというのは、実は孫文という存在があつたことだということをお知らせしましたが、私は、孫文というのは日本にとって「二つの絆」の役割を演じてきているのではないかと考えております。一つは日本と中国との関係、これをつなぐ役割ということです。孫文は、中国人自身にとっても「絆」の役割を現在果たし続けていますね。台湾の人と大陸の人とが話をする場合に、孫文ということであれば話ができるわけです。毛沢東や蒋介石となるとお互い戦争（内戦）をし合った仲なので、なかなか二人を話題に仲良く話をするというわけにはいかないところがあります。しかし孫文であれば、先ほど申しましたように清朝を倒して民国を創建したと、それから国共合作を推進したと。しかも孫文はその時点で生涯を閉じたのです。その後の国共対立などの場に孫文は居合わせなかったということも働いていると思いますけれども。

私たち日本人と中国人との間の関係においても孫文の存在については同じようなことが言えるだろうと思います。もう一つは日本人と在日華僑の人たち、神戸がまさにそうですが、この両者をつなぐ、そういう役割を孫文は果たしていると思います。先ほどお話ししましたように、孫文が日本に来るということになりますと華僑の人と日本人が一緒になって歓迎する。兵庫県や神戸市、あるいは神戸の商業会議所とか、さらには神戸の経済界の人たちを含めて孫文を歓迎するという点では非常に盛り上がる、「よし、やろう」ということになった。近代の中国人の中でこういう人物はいないのではないかと私は思います。これは戦前そう

だったというだけではなく、戦後においてもそうなのですね。少なくとも神戸においてはそうだと思います。横浜とか長崎については後に横山先生からお話があると思いますけれども。中国のことについて何かやろうかという話になりますと、華僑の人たちと神戸の市民が、一緒にやろうではないかという話にすぐなっていく。これには近代における神戸の華僑と神戸の市民、神戸の行政あるいは実業界との交流の長い伝統の上にあるということを感じています。特に孫文は、先ほど来お話ししてきましたように1913年と1924年の二つの良き思い出、素晴らしい思い出が神戸にはあるということ、これが非常に大きく作用していると思います。

孫文記念館をぜひご覧いただきたいと思いますが、その入口に「天下為公（天下を公と為す）」という孫文の書から取った碑があります(9)。今回の展示にも出品されている桜木さんという方に贈られた書にも同じような言葉を孫文は書いています。彼の好きな言葉の一つだったようです。この碑の裏に劉増華という人の書いた書が彫られています。「永奠親善之基（長く親善の基を定める）」と書かれています。戦後間もなくの時期でありますから、国民政府が華僑のことを管理する事務所を大阪に置いていました。劉増華はその代表でした。碑をご覧になったらぜひ裏側も見ていただきたいと思います。碑の元になった書は、先ほど申しあげました「大アジア主義」講演を行った時に孫文が、会場となった神戸高等女学校の求めに応じて書いたもので、今は神戸高等学校の校長室に「校宝」として大事に保管されています。この碑を作る時に活躍した池田豊という人物がいました。彼は民論社という団体を作って神戸の湊川で活動していました。この池田と神戸華僑の陳徳仁の二人が協力して、各界に働きかけてあの記念碑を建立したのです。池田がその時の「趣旨書」を書いています。その中に「将来は孫文記念館としてこれを施設し、広く孫文先生の御遺蹟をのこし度」とあります。将来は是非この移情閣を孫

文記念館にしたいものなのだとことを彼は訴えていたのです。この池田豊という人物がどういう人なのかということも、実は私たち記念館で調べておりますが、まだよく分からない点があります。当時世界連邦という運動を、尾崎行雄とか、賀川豊彦といった人たちが推進しておりました。池田は尾崎や賀川と交流があったようで、世界連邦を主張していました。池田がどこで孫文と接点を持ったのか。実は生没年もまだ分からない、兵庫県で出たいろいろな人名事典にも出てこないのですが、そのような活躍をした人物が実は孫文に惹かれて今に残る碑を建立したのです。戦争が終って後3年の時期に孫文を記念する碑を建立するために、神戸の人たちが華僑と一緒に奔走していたというのは、やはり神戸にとって素晴らしいことだったと私は思っております。そしてこのエピソードは、繰り返しになりますけれども、孫文と神戸との短いけれどもドラマチックな出会いの記憶が神戸では戦後ずっと生き続けていることの表れの一つではないかと私は思っています。

移情閣は阪神淡路大震災の前にいったん解体されました。完全に復元するために解体作業をしている時に震災に遭ったので、幸い被害がほとんどなかったのです。そのお陰で復元にとっての支障は最小限で済んだのです。「天下為公」碑の除幕式には小寺謙吉神戸市長と岸田幸雄兵庫県知事からも花輪が贈られ、移情閣の正面には神戸中華青年会という看板がかかっておりました(10)。これは戦争が終わった8月15日に神戸華僑の陳徳仁らが作った団体です。呉錦堂の親族から戦後移情閣の管理を委ねられていたのです。そういういきさつを背景に持つ建物であります。「天下為公」碑の製作に携わった人たちの写真が残っていますが(11)、右から二人目が池田豊です。数年前、その一人の元山清という方(左から二人目)のところをお訪ねして、作られた時のお話を伺ったこともあります。

また話は元に戻りますが「大アジア主義」講演

の時、主催は神戸商業会議所ですが、大阪朝日、大阪毎日、神戸又新、神戸と四つの新聞社が後援し、4紙が共同で講演会の「会告」をそれぞれの新聞に掲載しました。その影響もあって、たくさんの方が会場に押しかけました。当時日本政府があまり歓迎しなかった孫文を神戸の人は大歓迎をする、こういう構図ですね。今ではどうでしょう、中央政府があまり喜ばないことを地方の自治体がこのようにやれるかどうか。当時の神戸は日本経済のなかで大きな位置を占めていました。貿易の面でも横浜が関東大震災で大きな痛手を受けたということもありましたけれども、日本で最大の貿易の扱い額を誇った、そういう時代ですね。神戸では一方では激しい労働争議が起こっていましたが、ある意味では非常に活気のある時代でもあったわけです。4紙の「会告」は、意気盛んな宣伝文句になっております。当時の、つまり1924年という時期の日本人、あるいは神戸の市民が孫文をどういうイメージで描いていたかということを理解していただけるのではないかと思います。そこには三つのフレーズが使われています。孫文は「支那革命の先覚者」、つまり辛亥革命を成し遂げたということですね。それから「東亜聯盟の唱首」、これは日本側の期待を込めた言葉でもあります。そして「日支親善の楔子」と。「楔」、この場合は繋ぎ目、今で言うと「絆」ということになるのでしょうか。そういうものとして孫文を迎えたということを示しております。

話がまたずいぶん飛んでしまいますけれども、1980年代初、移情閣を孫中山記念館にするといういきさつについてですが、坂井時忠兵庫県知事、李万之神戸華僑総会会長そして須田勇神戸大学元学長、この3者が合意の署名をするという形で孫中山記念館が創設されることになりました(12)。そしてこれは昨年ですけれども、経済的にバックアップするというので、地元の経済界などが中心になって孫中山記念会賛助会というのが結成されました。この時会長になっていただいたのが田



崎雅元川崎重工業会長（当時）です。ここで1913年の川崎造船所社長の松方幸次郎とつながりますね。私は「神戸モデル」ということを言っておりますけれども、日本と中国を結ぶもの、それと神戸の中の日本と中国との関係を結ぶものとして戦前は華僑・行政・経済の三角形が形作られていました。現在はそれに学术界や市民なども加わる形で五角形の関係が神戸にはできていると思っております。そして孫文や孫文記念館というものはそのような五角形の関係の上にある、あるいはその五角形を繋ぐ「絆」の役割を果たしているのではないかと考えています。世界の華僑の孫文記念館の中でこのようなスタイルのものはたぶんここ神戸だけだと思いますね。

### おわりに―「天下為公」

2011年は辛亥革命100周年の年です。中国では大きな行事が計画されております。私たちもいろいろやろうと準備を始めています。それからこれはいづい先日の11月1日に設置したのですが、「天下為公」碑の説明文がようやく出来上がりました。ぜひご覧いただきたいと思っております。どういういきさつでこのような碑が作られたのかということ

説明しております。なお「天下為公」という言葉の説明にはいろいろありますけれども、昔、「大道の行われしや、天下を公と為す」、しかし「今、大道既に隠れ、天下を家と為し」、と対応関係となっていることに注意していただきたいと思っております。これら二つの言葉の間にはいろいろ説明が入っていますが、「天下為公」の実現している社会を「大同」といい、「天下為家」としている状況を「小康」と言っています。中国は今、全面的「小康」の社会の実現を国家目標としています。「大同」はまだ日程に上ってきていないのです。「天下を公と為す」、そういう「大同」の社会を実現したいというのが孫文の遠大な理想ではなかったかと思っております。

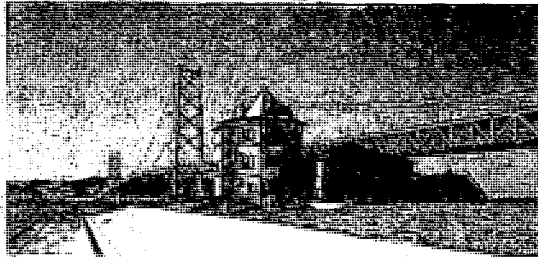
以上でお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

（後記：当日はパワーポイントで32枚の写真を用いてお話ししました。文章化するに当たり、写真は12枚にしぼり、一括してまとめておきました。（）内の数字は写真の順を示しています。なお、文章化に際し、講演にいくらか手を加えました。ご了承下さい。）



### 孫文と神戸

孫文記念館館長 安井 三吉



制作協力者 高堂聖 飯上真理子 徐小潔(孫文記念館)

### 孫文(孫中山)—その時代、その業績



- 1866年11月12日  
広東省香山県(現、中山市)に生まれる
- 1912年1月1日  
中華民国臨時大總統就任(南京)
- 1924年1月  
中国国民党第1回全国代表大会(第1次国共合作、広州)
- 1925年3月12日  
病没(北京)
- 1929年6月  
中山陵に改葬(南京)  
\* 奉安大典

2

### 奉安大典参列の日本人

1929年6月

南京



『萱野長知研究』(高知市民図書館)所収

### 孫文を迎え、支援した神戸の人々—華僑



呉朝堂



王敬祥



王敬祥

4

### 孫文を迎え、支援した神戸の人々—日本人—



三上登英



松方幸次郎

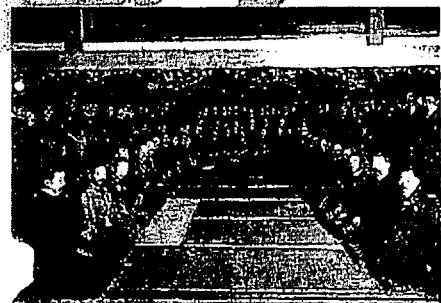


志川徳作

5

### 孫文歓迎の宴

1913年8月14日、神戸・常盤花壇(湊川)



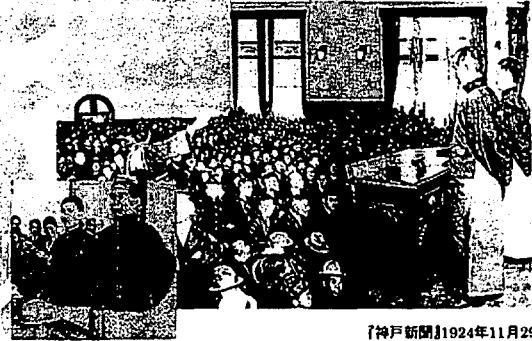
『孫文先生東遊紀念写真帖』(協成)所収

松海別荘（呉錦堂別荘）前での記念写真  
1918年8月14日、神戸・舞子



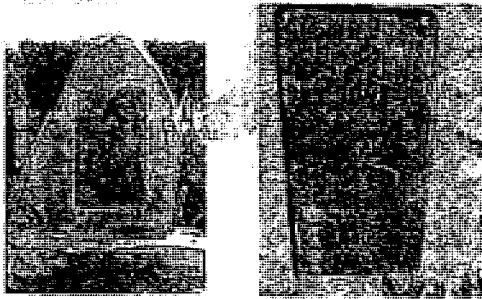
【孫文先生東遊記念写真帖】(館蔵)所収 7

「大アジア主義」講演  
1924年11月28日、兵庫県立神戸高等女学校



【神戸新聞】1924年11月29日 8

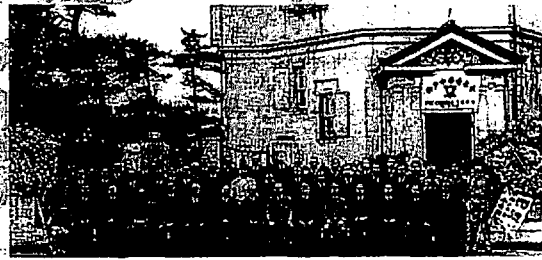
「天下為公」碑(1948.11、移情閣)



9

「天下為公」碑除幕式参列者

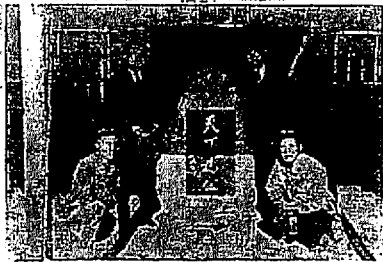
1948年11月12日、移情閣前



館蔵 10

「天下為公」碑の製作者たち

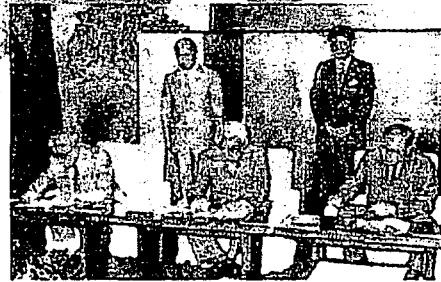
1948年



左から 牧野乙吉・元山潤・池田豊・森宇吉

牧野研之氏提供 11

孫中山記念館建設についての三者「覚書」  
具・筆・学術 1983年5月26日



左より 池田豊(孫中山記念館建設委員会委員長)、元山潤之(兵庫県知事)、森宇吉(神戸華僑協会会長)

【関西華僑報】第104号、1983年7月1日 12

【司会】 先ほどと同じように、事実確認のご質問がございましたら。お1人に限らせていただきますけれども、いかがでしょうか。

【質問者】 孫文と満州問題ということでは言及しておられなかったと思うんですけど、その辺についてちょっとお伺いしたいと思います。満州について、清朝の聖地であって、サライであったと私も理解しているんですけども、その辺は孫文は納得しておられたのか、それとも頭山満先生あたりとどういう話をされていたのかということをお私にはちょっと知りたいと思います。

【安井】 これは1912年頃の話になるかと思えます。中国東北部、満洲を日本に譲渡する、つまり

日本が孫文の革命について資金を援助してくれるならば、満洲は一時日本に譲渡してもいいと。租借ということだと思いますけれども、孫文がそう言ったことは事実だと私は思っております。孫文は、広東の出身で、万里の長城の外にある満洲は遠い地域と感じていたのではないかと思います。ある中国の研究者が言うように、孫文はさしあたりは日本に渡してもいいが、将来は取り戻す、と考える日本人に対してそのように言ったのではないかと、思っています。

【司会】 安井先生どうもありがとうございました。それではここでちょっと休憩を入れさせていただきます。3時10分に再開させていただきますのでよろしく願いいたします。

## 《講師略歴》

安井三吉

1941年 東京都生まれ。

東京大学文学部東洋史学科卒業。

神戸大学国際文化学部教授。

現在：神戸大学名誉教授、孫文記念館館長。

専攻：中国近現代史

主な著作：『孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路』（陳徳仁氏と共編、法律文化社、1989年）、『盧溝橋事件』（研文出版、1993年）、『中国近代化の歴史と展望』（池田誠氏、上原一慶氏と共編、法律文化社、1996年）、『1930年代華北をめぐる日中関係資料：柳条湖事件から盧溝橋事件へ』（2000年）、『孫文と神戸：辛亥革命から90年』（陳徳仁氏と共著、補訂版、神戸新聞総合出版センター、2002年）、『帝国日本と華僑：日本、台湾、朝鮮』（青木書店、2005年）、『図説中国近現代史』（共著、第3版、法律文化社、2009年）。